

序文

現象学は(略)経験をあるがままに、直接、記述しようという試みである。(略)現象学は、完全な哲学的自覚に到達する以前から、手法あるいは様式として、すでに行なわれ、認められ、動きとして現存していたのだ。(1-2p)

>現象学は、哲学的自覚(それが何を意味するのかはわからないけど)に到達する以前から、現存していたという。さて、どんなふうにか。

われわれが現象学の統一性とそのほんとうの意味とを見いだすのは、ほかならぬわれわれ自身のうちにおいてである。大切なことは(略)われわれにとっての現象学を定着し、客観化することである。(略)現象学は現象学的方法によってしか近づくことができない、それゆえ、よく知られている現象学の諸テーマを、それらが生のなかでおのずと互いに結びついていたように、意識的に改めて結びつけてみよう。(3p)

>ここでは、われわれ自身のうちにおいてという箇所が印象に残った。また、現象学的方法とは何をさすのか。それは、これからか。本書、以後に、わかるということか。

※

記述することが肝心なのであって、説明したり、分析したりすることではない。(3p)

>さて、これは何を意味するのか。

事象そのものに帰るということは、認識に先だつ世界に帰るということである。(5p)

>認識に先だつ世界とは、いかなる世界か。

私は事物を捉える作用において、まず私自身の存在を体験するのでなければ、いかなるものも捉えることができないであろう、という事情を明らかにすることによって、デカルト、とりわけカントは、主観もしくは意識を解き放ったのである。(5p)

>私自身の存在を体験するとはどういうことか。デカルトもカントも勉強してないからわからない。主観もしくは意識を解き放ったとあるが・・・

世界は、私がそれについてなしうるいかなる分析にも先だつて、そこに存在する。(6p)

>分析に先だつて世界は存在する。それはそうだ、とおもう。

現実には記述されるべきであって、組み立てられたり、構成されたりされるべきでない。(7p)

>ここでも記述することが肝心だと。現実には組み立てられたり、構成されたりした時点で、もうそれは現実ではない。組み立てられたり構成されたりした果ての(かつて)現実であったものということか。

知覚は世界に関する一つの科学ではない。それは一つの行為ですらない。つまり熟慮を経た上での態度の決定ではない。知覚は、その上にあらゆる行為が浮かびあがる背景であり、行為はこれを前提としている。世界は、その構成法則を私が手中にもっているような、一つの対象ではない。世界は、私のあらゆる思惟と明瞭な知覚との自然的な場であり領野である。(7p)

>知覚は行為の背景である。世界は対象ではない。自然な場であり領野である。

人間は世界においてあり、ほかならぬ世界のうちで自己を知るのである。(8p)

>世界のうちで、世界の外側からでなく内側から、そのなかで、そのなかにあつて、ということか。

※

還元は超越論的意識への還帰として提示されている。世界はこの超越論的意識の前では完全に透明なものとして展開され、一連の統覚によってすみずみまで生気づけられている。そして哲学者は、これらの統覚の成果からさかのぼって統覚を再構成する、という仕事を課せられることになる。(8p)

＞超越論的意識。さっぱりわからない。

世界は、まさにわれわれが表象するもの以外のものではない。但しわれわれがこれを表象するのは、人間もしくは経験的な主体としてではなく、われわれがみな、ただ一つの光であって、ともども同じ一者にあずかる限りにおいてである。(9p)

＞ただ一つの光。わからない。それに何か怪しい。

反省は世界を、異常な逆説的なものとして、顕わにするのだから、反省こそが世界についての意識なのである。(13p)

＞反省こそが世界についての意識なのである。意味はわからないが、なぜか惹かれる言葉。

世界を見届けそれを逆説として把握するためにこそ、かえって世界とわれわれとの馴れ合いを断絶することが是非とも必要なのであり、またこの断絶は、世界のいわれなき出現以外の何ごとをも、われわれに知らせることはできぬ、ということである。(13p)

＞馴れ合いを断絶することが是非とも必要というのは、そうかも知れない。

フッサールの未完の手稿のなかで、哲学者は永遠の初心者であるともいわれている。すなわち、哲学者は世人や科学者たちが知っていると信ずるものを、何によらず、既知のこととは見なさない。哲学がかつて真理をいいえたにせよ、かかる真理においても、哲学は自己の知識を既得のものと考えべきではない。哲学とは哲学自身の出発点に立ち帰って、くり返しこれを体験し直すことである。哲学のすべてはこの端緒を記述することに存する。そして結局、根本的な反省とは、非反省的な生に対する、反省自身の依存症を自覚することなのだ。非反省的な生こそ、反省の出発状況であり、恒常的な状況でもあり、終局の状況でもある。先のフッサールの言葉は、以上のようなことを意味していたのだ。一般に考えられたように、現象学的還元は、観念論的哲学の定式であるどころか、実存哲学の定式なのである。～ハイデガーの「世界一内一存在」は、現象学的還元を基礎として、初めて出現しえたのである。(13-14p)

＞哲学者は永遠の初心者、というのはいいな。哲学は自己の知識を既得のものと考えべきではない。根本的な反省とは、非反省的な生に対する、反省自身の依存症を自覚することなのだ。非反省的な生こそ、反省の出発状況であり、恒常的な状況でもあり、終局の状況でもある。このあたりもいい。はっきりとした意味はつかめていないもののいい。しかし次の一文はわからない。現象学的還元は、観念論的哲学の定式であるどころか、実存哲学の定式なのである。知識不足。

※

フッサールによれば、いかなる還元も超越論的であると同時に必然的に形相的である。すなわち、世界に関するわれわれの知覚を、哲学の視線のもとにおくためには、かえってこの世界措定との一体性を、つまりわれわれを規定している世界に対するこの関心との一体性を、断ち切ることが是非とも必要である。われわれのアンガージュマンそのものを眼前に浮かびあがらせるために、アンガージュマンの手前に後退しなくてはならない。つまり、われわれの実在の事実からその本性へ、現存在から本質へ移りゆかねばならない。しかしこの際、本質は目標ではなくて手段であること、われわれが世界のうちに事実に拘束されている事情こそ、まさに理解されるべき、概念的に把握されるべきことがらであり、また、これこそ、われわれのすべての概念的定着作用の向うべき極であることは、明らかである。本質を通過せねばならないという必然性は、哲学が本質を対象とするということの意味するのではない。むしろ逆に、われわれの実在はあまりに緊密に世界のうちに捉えられているので、世界におのれを投ずる際には、自己のかかるものとして知ることができない、実存の事実性を認識し把握するためには、かえって理念性の領域に退くことが必要である、ということの意味する。(14-15p)

＞ここでも断ち切ったり、退くことをいう。

われわれは、われわれ自身の経験を、つまり、われわれがそれであるところの、この意識の経験を、もっている。そして言語のあらゆる意味は、ほかならぬこの経験をもとにして測られるのだし、また言語がわれわれに対して何ごとかを意味すること自体、この経験のおかげで初めて可能となるのである。(15p)

＞経験ありき。経験あつてのこと。

世界の本質を探究することは、いったんそれを論議の主題にしてしまった後で、それが観念としてどのようにあるかを尋ねることではない。およそ主題化されるに先だって、それが事実としてわれわれに対してどのようにあるかを問うことである。(16p)

＞主題化されるに先だって、事実として、問う。

われわれがほんとうに世界を知覚しているのかどうかと怪しんではならない。かえって、世界とはわれわれが知覚する当のものであるといわなくてはならない。(略)われわれにとって明証的ということが果たして真理性であるのかどうか、あるいは、精神の欠陥のため、われわれにとっては明証的なものも、何らかの真理それ自体に対しては空しい錯覚なのではないか、と問うてはならないのである。というのも錯覚について語る以上、われわれはすでに錯覚を錯覚として認知しているのであり、そのうえかかる認知は何らかの知覚の名においてしかおこなわれえないからである。これと同時に知覚はその真理性をみずから証拠だてたことになる。(17-18p)

＞知覚しているのかどうかと怪しんではならない。錯覚について語る以上、われわれはすでに錯覚を錯覚として認知しているのであり、そのうえかかる認知は何らかの知覚の名においてしかおこなわれえないからである。知覚するとはどういうことかと、少し触れた気がする。

世界は私が思惟するものではなくて、生きるものである。私は世界に向かって開かれている。私はたしかに世界と交渉しているが、それを所有してはいない。世界は汲み尽くすことができないものである。(18p)

＞世界。まだそれが僕にはイメージできない。

形相的方法は、可能的なものを現実的なものに基礎づける現象学的実証主義の方法である。(18-19p)

＞形相的方法とは、なにか。

※

「いかなる意識もあるものについての意識である」、この命題は決して新しいものではない。カントは「観念論の論駁」において、内的知覚は外的知覚なしには不可能である。諸現象の連結としての世界は、私の統一の意識のなかで予想されており、私が私自身を意識として実現するための手段である、ということを明らかにした。(19p)

＞私の統一の意識のなかで予想されており、私が私自身を意識として実現するための手段である。というところには少しびっくりした。予測。実現の手段。

実存のうちにも共存のうちにも、純粋に偶然的な出来事というものはない。というのは実存も共存も、偶然を自己に同化してそれを道理と化するものだからである。(略)歴史は現在において不可分であるように、継起においても不可分である。(23p)

＞純粋に偶然的な出来事というものはない。

※

現象学が獲得した最も重要な成果は恐らく、極端な主観主義と極端な客観主義とを、世界もしくは合理性に関するその概念のうちで結合させてことであるだろう。(23p)

＞よくわからない。

現象学的世界とは純粋な存在ではなくて、私のさまざまな経験の交点に、私の経験と他人の経験との交点に、相互の噛み合いをとおして現れるところの、意味なのである。(23-24p)

>相互の噛み合いをとおして現れる。

哲学者は世界と他人と自己自身とを考察し、それらの関係を理解しようとする。(24p)

現象学的世界は先行する一つの存在を明るみに出すことではなくて、存在そのものを創設することである。哲学は先行する一つの真理の反映ではなくて、芸術と同じように真理の実現なのである。(24p)

>存在そのものを創設する、と読んで、混乱する。哲学は真理の実現、と読んで、またも混乱する。びっくり。

われわれは諸経験の連結という奇蹟にたえず立ち会っているのであり、またわれわれこそ諸関係のこの結び目なのだから、この奇蹟がどのようにして生ずるかを、われわれ以上に知っている者はいないのである。世界も理性も問題とはなりえない。(25p)

>われわれこそ諸関係の結び目。われわれ以上に知っている者はいない。世界も理性も問題とはなりえない。アタマ、ぐらぐらするわ。

真の哲学とは世界を見ることを改めて学ぶことである。(25p)

>なんか、勇気です。

現象学がいまだに未完成だという事実、いつも最初からやり直すというその態度は失敗のしるしではない。現象学が世界の神秘と理性の神秘を明るみに出すことをその使命としている以上、これは避けられないことであつた。(26p)

>いまだに未完成。いつも最初からやり直すというその態度は失敗のしるしではない。ここも、勝手に勇気づけられてしまった。

以上